



シニア社員のCSRトーク 特集

# 2

## IT活用のこれからに向けて、 シニアの知恵を活かすとき

ITはどのように私たちの生活や社会に貢献したのか、あるいはしていけるのか—国内にITという言葉が浸透する以前から、ITの現場に携わってきた日本ユニシスグループのシニア社員たちに「ITが人と社会にできること」をテーマに語り合ってもらいました。そこから浮かび上がったのは、IT活用の社会全体への広がりやを自ら担ってきたシニア社員だからこそ、「今、果たすべき役割」の重要性でした。司会進行は日本ユニシスCSR担当役員の柏木常務が務めました。

## 培った知識・ノウハウを 新たな価値の創造に活かす

**柏木** みなさんは、コンピュータが国内で利用され始めた頃から第一線に立ち、これまで、ITの急速な浸透を自らの仕事を通じて体感してきたわけですが、そうした変化をどのように感じていますか。

**原** 当初は、ITで既存の業務を効率化する、省力化するということがほとんどでした。それが最近ではITでビジネスそのものを変える、ビジネスを創り出すというように、IT活用の視点が大きく変化してきていますね。

**三口** 確かに、お客さまの中でも「このITを使えば、ビジネスをどう変えられるのか」といったITのビジネスへの活用法について質問される方が多くなっています。

**柏木** 私たちに期待される役割そのものが変わってきたということですね。

**原** システムの提案ではなくて、ビジネスの提案が求められるという変化があります。

**吉川** 情報技術や通信技術が急速に進化して、その適用範囲が大きく広がってきました。それに対し、システムや技術を提案したり提供したりすることを通じて、私たちもさまざまな技術や知識・ノウハウを蓄えてきたわけです。それがベースとなって、今は、変化が少し先まで見通せるようになり、お客さまが私たちに求める役割の変化を少し先取りする形で応えられるのではないかと感じています。

**高柳** 今、ユビキタスの時代になって、携帯電話とかICタグとか便利な技術が次々に登場していますが、それらの成功事例のほとんどは、これまで培ってきた知恵、あるいは暗黙知の組み合わせ、分野の異なる二つあるいは三つの知恵を組み合わせで生み出されたと言えると思います。私たちIT技術者の中に蓄積された知恵だけでなく、広くさまざまな知恵と組み合わせることで、さらに新しい価値を生み出していけるはずですね。

**柏木** ITが生活やビジネスに貢献というとき、そこにはこれまでの技術やビジネスの変化に対応しつつ蓄積してきた知恵、知識やノウハウというものがベースとしてあって、そこから新しい価値を生み出していけるということですね。

01 柏木 直哉 日本ユニシス CSR担当役員

02 三口 充高 日本ユニシス 情報セキュリティ部門

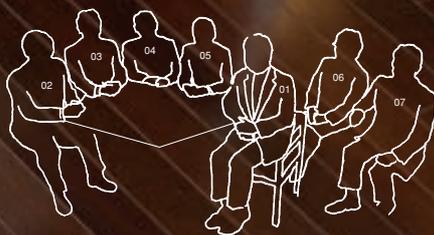
03 小川 豊 ユニアデックス ソフトウェアプロダクト部門

04 高柳 滋 ユニアデックス 商品企画部門

05 原 潔 日本ユニシス 総合技術研究開発部門

06 小田村 和江 日本ユニシス ソフトウェアプロダクト部門

07 吉川 章 日本ユニシス 金融企画部門



## IT活用を支えるには 知恵の継承がポイントに

**柏木** 今後もそうした貢献を続ける、新しい価値を生み出し続けていくためには、みなさんの持つ知恵、知識やノウハウを後輩の若い社員にうまく継承していくことが課題になりますよね。

**小田村** 継承という点では、私が入社した当時はチームで仕事をしていまして、チームの中には「すごいなあ、こんなふうになれたら」という先輩がいました。一緒に仕事しながらいろいろと技術もノウハウも見習い、吸収してきたわけです。ところが最近では技術が細分化していますし、その技術の変化もすごく速い。チームの中で学ぶという余裕があまりなくなっている気がします。

**高柳** 確かに、変化のスピードが速すぎて、先輩の技術やノウハウを習得しても5年くらいしか持たない（笑）。次々と新しいものが出てきて、一人ではカバーしきれないし、みんなで試行錯誤しながら身につけるといった状態。それも5年くらいしか使えない。

**柏木** ただ、そうした追い立てられるような変化の一方で、私たちは金融機関とか航空会社、電力会社とか、いわば社会のライフラインのシステムを担っていますよね。こちらの場合には変化への対応というより、絶対に止めないことが第一義。万が一、ストップしたら社会的な影響も大きなものになります。

**原** 障害を起こさない。万一、障害が発生しても、短時間で復旧させる。システムが停止しても業務を継続させていく、という視点からも、私たちは、技術やノウハウを活かしてきました。そのようなノウハウも一部は若い

世代に伝えられています。

**小川** 金融とか電力とか、ライフラインに関わる基盤システム部分の運用・保守の主力は40代、50代が担っているというのが実情です。まさにその分野のスペシャリストが担って、万が一に対応している。近い将来、こうしたシニアのスペシャリストはリタイアするわけで、若いスタッフにこうした基幹システムの運用・保守の技術やノウハウをどう継承していくかが課題になっています。そういったシステムの運用や保守のための技術に習熟するためには数年はかかりますから。

**吉川** お客様の中にも、とくにメーカーな



どでは技術の継承という、いわゆる「2007年問題」が大きな課題になっています。最近では、退職する熟練技術者のノウハウをITでなんとかカバーできないかといった相談を受けることも少なくありません。

**柏木** なるほど。そうした面でのITの可能性が検討されているということですね。金融や電力のシステム運用・保守については、どんな対策がとられていますか。

**小川** やはりシニア社員の持つ知識やノウハウは貴重であり、若手の技術者が学ぶべき事

## IT活用の進展と日本ユニシスの役割の変化

### IT活用の進展

#### 電算機の時代

コンピュータが登場。従来手作業で処理されていた給与計算、売上集計などに利用され始めた。

→1955年、日本初の商用コンピュータ「UNIVAC-120」が上陸（写真）



#### オンライン処理の時代

コンピュータ処理の大規模化が進む一方、オフコンの普及でさまざまな業務にコンピュータが利用され始める。

→1968年、日本初のオンラインバンキングシステム稼働  
→1970年、超大型コンピュータ UNIVAC1110が登場（写真）  
→1988年、日本ユニバックとパロースが統合、日本ユニシスが誕生



### シニア社員の証言

- 「日本ユニシスは最初から、ハードウェアだけでなくソフトウェアや運用管理などのサービスも含めたトータルなシステムとして、お客様に提供してきた。」
- 「コンピュータは当初、業務の効率化、省力化・省人化を目的に導入・活用されてきた。」

項は多いと思います。シニア社員の持つそれらの知恵と若手技術者が協調して業務を遂行していくということが重要ではないかと思えます。蓄積したノウハウを最先端の技術で実現していくことが今後ますます要求されてくるのではないのでしょうか。

## 望ましいIT活用のあり方を 提唱していくという役割も

**柏木** 2007年問題にも関連しますが、当社では高齢者や女性、ハンディキャップを持った方にも積極的に活躍してもらおうとさまざま



々な取り組みをしてきました。そうしたさまざまな人材を活用して全社のパワーを高めていこうということですが…。

**小田村** 女性の立場でいうと、制度としては早くからできていたのですが、実際にそれを利用しようとするとなかなか難しい面もあります。それぞれ組織内で役割を担って仕事をしているので、多様な人の状況を踏まえたマネジメントも容易ではない。そうした面で今後の課題かもしれません。

**原** この話題については、在宅勤務制度や成

果主義などが取りざたされていますが、それよりも多様な環境で仕事を行える設備を準備することと、目的を共有してやりがいを感じられるコミュニケーションの場を持つことで、私たちシニアにとっても女性にとっても、さらに働きやすくなると思います。

**柏木** 少子高齢化が進んで、これからはできるだけ多くの人たちのパワーを活かす必要が出てきます。ITやネットワークの環境はすでにそれを可能にする段階になっている。ネットワークでつないで入社しなくても仕事ができる、少しの空き時間に仕事ができる。そうした仕事的环境をつくっていくということでも、ITは社会に貢献できますよね。

**三口** 確かに、世界中がネットワークで結ばれて、どこでもいつでも仕事ができる、ITを基盤にワーキングスタイルも雇用の仕方も大きく変わりつつあるのが現状でしょう。仕事をする上でも生活する上でもますます便利になってきます。ただ、そうした環境に応じた新しい枠組みは必要だと思います。

**小川** 便利になった反面というのは確かにありますね。24時間仕事ができるということは、それを求められるということにもなりますから（笑）。

**柏木** 私たちシニアはこれまでIT活用の広がりをずっと見てきたわけで、仕事や生活を便利にしてきた反面、影の部分というかある種の危うさも知っているわけですね。我々のように多くの経験やノウハウを持っているシニアが、それを活かして社会に対していろいろな提言をしていくこと、またそれらの知恵をどのように継承していくか、それがシニアに問われている重要な役割の一つでしょうか。

### オープン・ネットワークの時代

さまざまなコンピュータ・システムをネットワークでつないで、業務全体のスピードアップと効率化が図られる。PCの普及で仕事のスタイルが大きく変化する。

- 1995年、Windows95が登場、PCの普及が本格化
- 1997年、ネットワーク専門会社・ユニアデックスが誕生
- 2000年、オープンエンタープライズサーバー「ES7000」が登場（写真）

- 「個々の技術やシステムではなく、それを使ってどんなビジネスができるのか、どんな価値を生み出せるのかに視点が移ってきた。」
- 「経営課題に対し、ITを活用してその解決策を提案する、“ソリューション”という言葉が最初に使い始めたのは日本ユニシスではなかったか。」



### ユビキタス・ネットワークの時代

無線通信技術やIC技術の進化により、携帯電話、ICカードなどが普及。これらをネットワークで結び、仕事や生活全体をITネットワークが支える時代が到来した。

- 2005年、愛知万博の設備資材管理にICタグを利用しリサイクルを行う

- 「ITが高度化、細分化され新技術が次々登場する中でも、当初からトータルシステムを提供してきた私たちの知識・ノウハウや技術がベースになっている。」
- 「いま、お客さまは企業価値の向上にITをどう使うかという視点からの提案を強く望んでいる。」